

Title	数学オリンピック予選で出会った友人や恩師に導かれ、純粋数学の道へ：勝良健史准教授に聞く
Sub Title	
Author	田井中, 麻都佳(Tainaka, Madoka)
Publisher	慶應義塾大学理工学部
Publication year	2016
Jtitle	新版 窮理図解 No.23 (2016. 12) ,p.4- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	インタビュー
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001002-00000023-0004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



数学オリンピック予選で出会った友人や恩師に導かれ、純粋数学の道へ

数学オリンピックの予選で知り合った友人に誘われて、ともに勉学に励み、数学者の道を目指すことになったという勝良さん。その後、師事した恩師や異分野の共同研究者との出会い、国内外での数々の経験、そして家族が、研究者としての勝良さんのいまを支えている。

——どんな幼少期を過ごされたのですか？

生まれは京都府向日市で、いわゆるベッドタウンで育ちました。父がボードゲームやパズルが好きな人で、家にオセロやジグソーパズル、バックギャモン、ルービックキューブなどさまざまな遊び道具があって、幼い頃からよくそれらのゲームで遊んでいました。家族で過ごすときも、ボードゲームをよくやっていましたね。

——やはり幼い頃から算数が得意だったのですか？

算数は得意なほうでしたが、計算は決して得意ではありませんでした。今でも計算は苦手です。好きだったのは、知能テストに出てくるようなパズルや図形の問題です。

中学受験のときに挫折を味わいました。洛星中学・高校入学を目指して勉強していたのですが、入試のときに算数で1問だけどうしても解けない問題があって、その問題に固執するあまり、ほかの問題を見直さなかったら、たくさん計算ミスをしていたのです。結局、友人たちは洛星へ、私だけが東大寺学園に行くことになりました。以来、数学の問題を解く際には、別の方法を使ったりして、3～4回答え合わせをするのが習慣になりました。中学受験での挫折がよい教訓になっています(笑)。

——いつから数学を研究しようと思われるようになったのですか？

純粋数学の面白さに触れたのは、高校2年の終わりに、数学オリンピックの日本代表候補20名に選ばれたのがきっかけです。それまで、自分より数学ができる学生に出会ったことが

なかったもので、たいへん刺激を受けました。

残念ながら代表の6名には選ばれなかったのですが、高校3年の夏に代表候補者などが集う合宿に参加することになり、そこで出会った同級生が私の人生を変えることになります。彼らから、一緒に東京大学へ進学して、数学を勉強しようと誘われたのです。そこで、地元に近い京都大学ではなく、東大への進学を決めました。東大理科1類に進学し、上京して1人暮らしを始めることになりました。

入学してからは授業にはあまり出ないで、その友人たちとテキストを決めて、週に1度集まって輪講していました。その頃は、とにかく数学の知識を吸収することに必死で、かなりの時間を費やしていましたね。

——では、大学時代は数学に没頭していたのですか？

数学の勉強以外にも、その友人の誘いで塾の講師のアルバイトもしていました。中高生に大学の数学を教えるという塾で、カリキュラムやテキストも自分たちでつくるなど、アルバイトでありながら主体的に関わっていました。そのときの経験が、人に教えるという現在の仕事につながっていると思います。

それから、さまざまな大学の学生が集まるインカレの山登りサークルにも参加していました。3泊4日といった日程で、南アルプスなど3000m級の山にテントを持って登ったりしました。

——学部ときに飛び級されたのですね？

ええ、これもその友人たちの誘いで、3年生しか受けられない飛び級試験を受けて、ともに学部3年で中退し、修士課程へ進学しました。友人2人は整数論を選びましたが、私は作用素環論を専門とされている河東泰之先生の研究室に入りました。

河東研究室のセミナーでは、ノートを見ないで話をすることを要求されました。このスタイルは、私の研究室でも踏襲しています。最初は大変でしたが、これは暗記を強要するものではなくて、きちんと問題を理解して、自分の頭で再構築する力を養うための方法論です。数学に限らず、こうした訓練をしておくことは、社会へ出てからも役立つと思います。





修士課程2年のときには、カリフォルニア大学バークレー校の数学研究所 MSRI に1年弱ほど留学の経験もしました。

その後、博士課程を2年で修了して結婚し、東大大学院数理科学研究科で学術振興会の特別研究員（PD）として研究を続けました。この時期に、オレゴンでの長期滞在も経験することができました。それから、学術振興会の特別研究員（SPD）として、北海道大学大学院理学研究院で3年間、のびのびと研究生活を過ごしました。3年間世界を飛び回っていたのですが、この間に培った人間関係が、いまの自分の研究を支える基盤になっています。

もう1つ、北大時代に得たことといえば、札幌の喫茶店で漫画『ヒカルの碁』を読んで、囲碁に目覚めたこと。現在は、囲碁三段です。

——数学者はいままでこそ企業から引っ張りだこですが、一方で、数学研究者の就職は難しいとも聞きますね。

数学研究者というのは狭い門なので、研究の実力の他にもタイミングや運が必要なのだと思います。私が博士課程を修了したころは、研究者を目指す若い人が増えていたのに職の数は減っている時期だったので、椅子を勝ち取るのは熾烈な戦いでした。結局、北大のあとは半年間東大のポスドクをしたのちにトロント大学のポスドクになりました。トロント大学に向かう直前に慶應大学から採用の内定を得たので、トロントでの滞在を予定より短く半年で切り上げ、2008年4月から慶應義塾大学理工学部数理科学科の専任講師として着任しました。とても良い大学に就職できたおかげで、5年間のポスドク時代も無駄ではなかったと感じます。

慶應大学理工学部の良さは、先生と生徒の距離が近く、まさに「半学半教」を実践しているところですね。また、私が知っている国内外の数学系の学科とは異なり、慶應大学の数理科学科は純粋に数学の理論を究めるだけでなく、数学の応用にも力を入れています。学生も卒業後は研究者になる人は少数で、教員になったり企業に就職するなどさまざまな方面へ進む。統計や計算機科学の研究室など、幅広い学科の教員同士の交流も盛

んで、私自身、視野が広がったと感じています。

——先生ご自身も共同研究をなさるのでしょうか？

ええ。最初は1人で研究していたのですが、トロントにいたときに、集合論の研究者が私の論文を読んで、ある問題と一緒に取り組まないかと研究室に訪ねてきたことがあるのです。その問題は30～40年ほど解かれていなかった難問でしたが、一緒に研究することで解決できました。以来、私自身も積極的に他の研究者に声をかけるようにしています。

——どういうときにひらめくのですか？

問題を解く際には、いくつかの例や現象の共通点を見出して、文章化するのが肝です。そうやってずっと考えていると、リラックスした瞬間にふとひらめくことがある。シャワーを浴びていたり、歩いていたり、いろいろです。ひらめいたときは、嬉しくて、思わず共同研究者に電話をしたこともありました。

だからこそ、一緒にいてリラックスできる家族の存在はとても大切だと感じています。私の良き理解者である妻と、小学3年の長男、年長の次男の4人家族です。長男は囲碁の腕前はすでに私と同じ三段で、負かされることも（笑）。神奈川県代表にも選ばれたんですよ。次男も私に似て、ボードゲーム好きで、だんだん強くなってきており、将来が楽しみです。

◎ちょっと一言◎

学生さんから：

● 勝良研究室に入ったきっかけは、先生の授業が圧倒的に面白く、難しい問題もイメージしやすかったから。確かに、セミナーのときにノートを見てはいけけないというのは大変ですが、物事を自分で理解して、筋道を立てて人前で話すうえで、とてもいい訓練になっています。

（取材・構成 田井中麻都佳）

さらに詳しい内容は
<http://www.st.keio.ac.jp/kyurizukai>



真理に近づくためには、先の見えない地道な計算や思考実験を繰り返す必要がありますが、たどり着くことができた真理は、とても単純で美しいものです。
これからも美しい真理に数多く出会ってみたいです。

勝良 健史

Takeshi Katsura

京都府出身。専門は作用素環論の中の C^* 環論。特に力学系や集合論などと関連する C^* 環の研究を行っている。2003年、東京大学大学院数理科学研究科博士課程修了、博士（数理科学）。北海道大学、東京大学、トロント大学でのポスドクを経て、2008年4月より慶應義塾大学理工学部数理科学科専任講師。2012年4月より現職。

